

公益財団法人 三重医学研究振興会  
令和4年度医学研究助成金研究成果報告書

令和5年3月16日

吉田壽記念医学研究振興会賞（臨床医学部門）

報告者 指名（年齢） 谷口 清州（63歳）

所属・職名 国立病院機構三重病院 病院長

#### 受賞の感想と今後の抱負

これまで表彰されるようなこととは無縁の生活でしたが、このたびは栄養ある吉田壽記念医学研究振興会賞を頂くことになり非常に恐縮しております。これまでに一緒に働いてきた同志の方々に御礼申し上げますとともに、今般これまでの地道な感染症対策活動を評価して頂いた三重医学研究振興会ご関係の方々に深謝申し上げます。今後も三重県における感染症対策につながるような研究を継続して三重県の医学研究及びみなさまの健康に貢献できればと考えております。

#### 受賞テーマ

「感染症対策における幅広い経験に基づく日本及び地域でのパンデミック対策への貢献」

#### 臨床医学（診療）分野に於いて成し遂げた顕著な業績

1. 感染症法の改正に伴い、感染症サーベイランスのデザインからインパクトの解析に至るまでの戦略的な研究を行い、日本の感染症サーベイランスの発展に寄与してきたこと。
2. 日本においてはじめてとなる実地疫学専門養成コース（Filed Epidemiology Training Program; FETP）を設置を推進したこと。
3. 国際的なサーベイランスシステムに関与し、世界アウトブレイク対応システム（Global Outbreak Alert and Response Network; GOARN）の設立と国際保健規則の改正に貢献したこと。
4. これまでにウガンダでのエボラ出血熱、2000年代初頭の鳥インフルエンザ H5N1、2003年の重症急性呼吸器症候群（SARS）、2009年の新型インフルエンザ A/H1N1pdm09等の国際的なアウトブレイク調査に参加した経験を踏まえて、今般の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の対策に貢献したこと。
5. 日本における新型インフルエンザ対策のために、対策行動計画、サーベイランスのガイドラインの他、新たな新型インフルエンザに関するガイドライン策定に貢献したこと。
6. 上記の経験に基づき、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）をはじめとして、三重県における感染症サーベイランスと対策に貢献してきたこと。
7. ガーナ国との長い共同研究歴により途上国における感染症堤策へも貢献してきたこと。

#### 業績の概要と将来展望

私の研究歴は鹿児島市立病院小児科在勤時に始まり、当初は主臨床的な研究・検討等を行っていたが、その後静岡県立こども病院臨床病理科、ガーナ国野口記念医学研究所、国立療養所三重病院にて、種々の実験室研究を行った。

国立感染症研究所では、実験室研究とともに、サーベイランスデザイン、サーベイランス手法、定点サーベイランスからの推計方法、数理モデルによるインパクトの解析など、サーベイランスに関する研究を行い、この後症候群サーベイランスについての研究を経て、各疾病ごとのサーベイランスの研究を行ってきた。これらは最終的に感染症法の改正と日本における感染症サーベイランスの開発・設計に

貢献できた。

一方では日本においてアウトブレイク調査の機能を充実させることを目的として、米国 Centers for Disease Control and Prevention (CDC) から講師を招聘して日本における実地疫学専門家養成コース (Filed Epidemiology Training Program; FETP) の立ち上げに加わり、これは現在も発展しつづけている。

また季節性インフルエンザに関する血清疫学データ、サーベイランスデータ、過去の対策の評価からインフルエンザの疫学的解析に関する研究を行い、これらの成果から新型インフルエンザ対策の研究を進め、新型インフルエンザパンデミック発生時のサーベイランスや対策の効果などの研究を行い、日本の新型インフルエンザ対策への貢献とつながっている。

世界保健機関 (WHO) 派遣時には、当時ウガンダで発生したエボラ出血熱のアウトブレイク調査に参加し、疫学調査システムやリスク因子の研究に関与し、WHO 在職中に、世界アウトブレイク対応システム (Global Outbreak Alert and Response Network; GOARN) の設立と国際保健規則の改正に関連して、サーベイランス手法の研究を行い、またアウトブレイク管理システムの開発を行った。

帰国後に、重症急性呼吸器症候群 (SARS) の世界流行に遭遇し、SARS の疫学的研究を行い、成果は日本政府および日本国民に提供された。この後厚生労働省新型インフルエンザ専門家会議の委員として、新型インフルエンザに関するガイドライン策定や、WHO のパンデミックサーベイランスガイドラインの策定にかかわっている。2005 年からの鳥インフルエンザウイルス H5N1 感染症の発生についても WHO と協力の下、鳥インフルエンザ対策の研究と共に、国内における対応に貢献した。インドネシアにおいては、H5N1 感染症の多発を受け、JICA インドネシア鳥インフルエンザ対策強化プロジェクトにおいて調査を行った。

2009 年のインフルエンザ A/H1N1pdm09 によるパンデミックに際しては、国立感染症研究所感染症情報センターにてサーベイランスと疫学調査を主導し、政府への提言とともに、報道機関、国民への情報提供を行うとともに学術論文にもまとめた。また、2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では発生早期に厚労省の現地対策班として現地入りして、避難所における感染症対策を指導した。

2013 年に国立病院機構三重病院に異動し、一般小児科臨床を行いつつ、ノロウイルスやインフルエンザ、RS ウイルスなどの小児感染症における臨床研究とともに、これまでに行ってきた感染症法に基づく発生動向調査の評価と解析方法の研究を継続し、三重県における定点サーベイランスの研究を行っている。東京大学医科学研究所と国立感染症研究所との協力において、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS) においてガーナにおけるサーベイランス強化を行い、同時に AMED の研究費により検疫の機能強化を行った。厚生労働科学研究費にて新型インフルエンザ発生時のリスク評価のための研究班を立ち上げ、国立病院機構本部と協力して、NHO に属する 143 病院のデータから季節性インフルエンザと新型インフルエンザ発生時のリスク評価のための枠組みを開発していたところ、今般の COVID-19 パンデミックに遭遇し、これまでの研究成果を元に国家的な対策に協力し、対策に必要な情報を厚労省アドバイザーボードに提供した。

COVID-19 パンデミックに際しては、これまでの感染症対策のパンデミック対応の経験を活かし、国レベルでは基本的対処方針分科会の構成員、三重県新型コロナウイルス感染症対策協議会の委員としてそれぞれの対策に協力した。病院としては三重県すべての小児の COVID-19 入院例を受け入れた。2022 年にはオミクロン株の流行に伴い、三重県において定点サーベイランスを行い、また今後のパンデミックに備えてサーベイランス戦略の研究班を主催して、電子データによるサーベイランス等の研究を行った。

2023 年 3 月現在、COVID-19 は小康状態となっているが、今後も変異株の出現とともに大小の流行波が継続することが危惧されている。継続して世界の状況と最新情報を収集しつつ、日本全体、あるいは三重県におけるサーベイランスの活動を継続している。特に現在では今回のパンデミックの反省を踏まえ、次のパンデミックに備えるための戦略的なサーベイランスの設計を行っており、継続して日本政府と三重県でのパンデミック対策への貢献が期待される。一方では継続して WHO のアドバイザー・グループのメンバー、そして途上国における国際協力研究も継続しており、成育医学分野大学院の指導教官として、日本及び海外の若手研究者の育成にも尽力していると考えている。

本業績における実績

#### 最近の講演など

谷口清州. 世界におけるインフルエンザの流行状況と対策. シンポジウム 17 グローバル感染症～海外渡航再開に向けて. 第 92 回日本感染症学会西日本地方会学術集会・第 65 回日本感染症学会中日本地方会学術集会. 2022 年 11 月 5 日、長崎.

谷口清州. 小児呼吸器感染症における病原体診断とサーベイランス、そして新興呼吸器ウイルス感染症. 第 54 回日本小児感染症学会総会・学術集会. 2022 年 11 月 5 日、福岡.

谷口清州. 今冬のインフルエンザと COVID-19 の混合流行に備えて . 第 26 回日本ワクチン学会学術集会. 2022 年 11 月 27 日、高松.

谷口清州. 第 82 回三重県小児保健協会学術集会 第 69 回日本小児保健協会学術集会イベント. 新型コロナの疫学-おとなから子どもへ. 2022/3/6

谷口清州. 国際保健医療学会第 40 回西日本地方会. COVID-19 パンデミックと今後のグローバル・ヘルス・セキュリティ. 2022/3/5

#### 主な学術論文

Mitsushima S, Horiguchi H, Taniguchi K. Risk of Underlying Diseases and Effectiveness of Drugs on COVID-19 Inpatients Assessed Using Medical Claims in Japan: Retrospective Observational Study. *Int J Gen Med.* 2023 Feb 21;16:657-672. doi: 10.2147/IJGM.S394413. PMID: 36851998; PMCID: PMC9960711.

Taniguchi K, Hashimoto S, Kawado M, Murakami Y, Izumida M, Ohta A, Tada Y, Shigematsu M, Yasui Y, Nagai M. Overview of infectious disease surveillance system in Japan, 1999-2005. *J Epidemiol* 17(suppl): S3-S13, 2007.

Taniguchi K, Ikeda S, Hagiwara Y, et al. Epidemiology and burden of illness of seasonal influenza among the elderly in Japan: A systematic literature review and vaccine effectiveness meta - analysis. *Influenza Other Respi. Viruses.* 2020;00:1-22.

Watari T, Tokuda Y, Taniguchi K, Shibuya K. Incidence of a n d Ivermectin Prescription Trends for COVID-19 in Japan. *J Gen InternMed* DOI: 10.1007/s11606-022-07877-8

Shimizu K, Sridhar D, Taniguchi K, Shibuya K. Reconsider this summer's Olympic and Paralympic games Serious questions remain about managing the games safely. *BMJ* 2021;373:n962, <http://dx.doi.org/10.1136/bmj.n962>

Tokuda Y, Sakihama T, Aoki T, Taniguchi K, et al. Independent investigation may be more reliable in the event with political nature. *J Gen Fam Med.* 2020;00:1-1.

Tokuda Y, Sakihama T, Aoki M, Taniguchi K, Deshpande GA, Suzuki S, et al COVID-19 outbreak on the Diamond Princess Cruise Ship in February 2020. *J Gen Fam Med.* 2020;21(4):95-7.

Taniguchi K, Ikeda S, Hagiwara Y, et al. Epidemiology and burden of illness of seasonal influenza among the elderly in Japan: A systematic literature review and vaccine effectiveness meta - analysis. *Influenza Other Respi. Viruses.* 2020;00:1-22.

#### 主な著書

谷口清州. 副反応報告システム. ワクチン 日本ワクチン学会編 朝倉書店 39-46. 2018

谷口清州. 感染症疫学ハンドブック (監修). 谷口清州監修, 吉田真紀子・堀成美編集. 医学書院、2015 年 06 月.

谷口清州. 感染症のリスクアセスメント (分担執筆). 「感染症疫学ハンドブック」. 医学書院、2015 年 06 月.

谷口清州. Q90、Q91 (分担執筆). 中野貴司編集「まるわかりワクチン Q&A」. 日本医事新報社 p 301-306. 2015 年.

谷口清州. 感染症サーベイランス (分担執筆). 日本公衆衛生協会編「感染症予防必携第 3 版」 25-33pp、2015 年 6 月.

#### 略歴

昭和 59 年 3 月 31 日 三重大学医学部医学科卒業  
昭和 59 年 5 月 1 日 三重大学医学部附属病院小児科研修医  
昭和 60 年 7 月 1 日 鹿児島市立病院小児科レジデント  
昭和 62 年 7 月 1 日 静岡県立こども病院臨床病理科シニアレジデント  
平成 2 年 10 月 1 日 三重大学医学部附属病院小児科医員  
平成 3 年 5 月 1 日 厚生連鈴鹿中央総合病院小児科医師  
平成 4 年 11 月 1 日 ガーナ国野口記念医学研究所 JICA プロジェクトチームリーダー  
平成 7 年 4 月 1 日 国立療養所三重病院小児科医師  
平成 8 年 10 月 1 日 国立予防衛生研究所感染症疫学部主任研究官  
平成 9 年 4 月 1 日 国立感染症研究所感染症情報センター主任研究官（組織再編名称変更）  
平成 11 年 4 月 1 日 国立感染症研究所感染症情報センター感染症対策計画室長  
平成 12 年 4 月 1 日 世界保健機関ジュネーブ本部感染症対策部メディカルオフィサー  
平成 14 年 3 月 1 日 国立感染症研究所感染症情報センター第一室長  
平成 25 年 4 月 1 日 国立病院機構三重病院臨床研究部国際保健医療研究室長  
平成 27 年 4 月 1 日 国立病院機構三重病院臨床研究部長  
令和 2 年 4 月 1 日 国立病院機構三重病院院長（現職）

#### 専門分野

小児科学、小児感染症学、感染症疫学、サーベイランス、パンデミック対策、新興感染症対策

#### 医学博士・専門医資格など

医学博士（三重大学）、小児科専門医・指導医、ICD（インフェクション・コントロール・ドクター）、病理解剖医（病理解剖）、社会医学系専門医・指導医